

2022. 5. 29. 主日礼拝説教  
聖書： マルコによる福音書 12章 28～34 節  
『愛するという課題』

エルサレム入城以来続いてきた律法学者やファリサイ派といったユダヤ教の既存権力との論争は本日の箇所を以て終了してゆきます。そこで締めくくりにあわせて「最も重要な掟」という小標題が記されています。

本日の箇所は、質問者の問い(28)・イエスの答え(29-31)・質問者の賛意(32-33)・イエスの同意(34)という構成になっています。これを教育的対話構造といえます。

さて、物語は一人の律法学者の問いから始まります。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」という質問です。

当時のユダヤ教は613もの掟がありました。もちろん大小・軽重の差はあったのですが、掟=戒めを守ることに極度に偏重していた背景がうかがえることかと思えます。こういった教義偏向主義はいつの時代にあっても自らの自浄作用を失い、対話の可能性を放棄し、世界を二元化し、自己の正当性だけを声高に主張する末期的症状を産み出します。

しかし、この律法学者の真摯な問いかけにイエスも同じく真摯に答えます。「第一の掟は神は唯一で、神を愛しなさい」という申命記 6章 4-5 節。「第二の掟は隣人を自分のように愛しなさい」というレビ記 19章 18 節を最も重要な掟であると宣言されます。

この箇所はご存じのようにマタイ(22;34-40)やルカ(10;25-28)にも記述されています。つまり、マルコのオリジナルの記事として描かれた所謂「マルコのイエス像」がそのままマタイとルカのイエス像、ひいては新約聖書のイエス像として採用されたということなのです。そこにはパウロのイエス理解が影響を与えています。例えば「隣人を自分のように愛しなさい」(ローマ 13;9)、「律法は『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」(ガラテヤ 5;14)等があります。

先に述べましたように、当時のユダヤ教はすべての掟を神の意志の表現と

して絶対視していました。優劣はなかったのです。これはこれで方法論として筋が通っていますから誰もが納得しやすいのです。

しかし、パウロやマルコは「それは違う」と考えたのです。なぜならば、人々が窒息状態に陥っていたからなのです。掟とはその多くが祭儀という儀式化した行為でした。それらを遵守しようとするのは分かります。けれども、そこには生きる人間の生と死が規定されていないのです。つまり、人が人を愛し、赦し、慰め、励まし合うといった人生の当たり前の喜びや哀しみが一切評価されないのです。

イエスの教えとはこの 613 もの掟にがんじがらめにされている人々を解放したのです。当たり前の喜びや哀しみの側に寄り添われて受け入れられる主イエスと出会う時、人は初めて生きる希望を自分のものにしたのです。

第一の掟は？と聞かれて二つ答えるのは論理的におかしいことです。ここでは第一の掟の神への愛が、第二の掟の隣人愛の上に位置づけられているではありません。二つは全く同じ重みを持つのです。この二つの掟の結合によって、もはや他の掟は相対化されてしまっているのです。全ての掟を絶対視するユダヤ教の律法理解に対して、キリスト教は愛という視点から律法を解釈したのです。これは愛についての革命的なイエスの宣言なのです。